『地域社会における青年の活動と組織化』

— 北上山系岩泉町の事例 —

発表者氏名

所属

不破 和彦

東北大学教育学部

山岸 治男

東北大学大学院教育学研究科

新妻 二男

”

高木 博

”

大坪 正一

”

I 序

今日、中央行政によるさまざまな「地域開発」「農林漁業近代化」が政策化され、具体的に地域のすみずみまで浸透するなかで、地域社会は大きく変化せざるをえない状況にあり、現に変化しつつある。

農村農業を例にとるならば、農工間の発展における不均衡と、農業所得の相対的低下、農家の兼業化と農民層の分解、商品経済のいっそうの浸透拡大と消費経済の増大等々の現象をみても、資本主義体制下、小農制を特質とする日本農業の矛盾はいよいよ顕在化しつつある。

こうした矛盾は、農村に限らず、地域のいたるところで今や明白となっており、地域社会は変化せざるをえない段階に達していると考えられる。

この地域社会の変貌は、現在及び将来を担う青年層の動向と決して無関係ではありえず、地域社会と青年は、必然と深く幅広い対応関係を示すものと考えられる。

本研究は、地域社会に生活する「青年」に焦点を据え、彼らの地域社会の認識と、そこから生みだされる地域社会への積極的な対応を実証的に明らかにしていこうというものである。その場合、青年の対応姿勢が最も如実に示されるものとして、地域集団としての青年集団が第一に考えられてくるが、本研究は「青年」と地域集団としてのみ捉えるのではなく、そうした集団的結合をとらない多くの「青年」の動向にも目を向け、彼らの学習なり活動も見ておきたいと思う。すなわち、地域社会における、青年の組織化及び活動の実態と、それらが地域社会の生産、生活にとって、また地域社会運動にとってどのような意味をもちえるものであるのか、ここで問われることになる。

II 岩泉町における青年会活動の史的展開

—旧岩泉町の町青協を中心にして—

岩泉町の「青年」と地域社会の対応関係を歴史的に見ていくと、およそ2つの時期に区分できる。

この時期区分は、青年の組織化および活動の程度を指標にしたものであり、地域集団としての青年集団の展開過程と、地域社会との関係のなかで歴史的に見たものである。

まず第一の時期は1945年の敗戦から1960年の安保までの時期である。この時期は農村の経済的・社会的地位のみかけの向上という基盤を背景に、さまざまな解放感や空虚感が混在して、青年のあいだにさまざまな娯楽・文化的活動を行なう催しや集団が作られるようになっていく。そして、それらは、それを構成する青年層の違い、あるいは外からさしのべられるリーダーシップの違いなどにより、さまざまに分かれていくことになる。こうした全国的な青年の動向のなかで、昭和25年頃岩泉町では「青年の森」(注1)の処分をめぐる、町当局と町青協(注2)の間に衝突が起った。結局は町当局の一方的な処分に奪われることになったが、この闘争の青年に与えた影響は大きい。

この闘いと境に、町青協は多くの青年を結集するにいたり、活動にも質的転換が見られてくる。すなわち、これまで「お祭青年会」とまで呼ばれていた青年会にはじめて社会科学の学習(注3)が取り入れられるようになる。また演劇・弁論・合唱などの文化活動と共に、地域を考えた地域課題を実践的に解決するという方針が打ち出され、農地改革後の地域社会の建設を目標とした岩泉町農村青年建設班が町行政の指導のもと、町青協のメンバーが中心となって結成される。この運動は農地改革後の農民の生産技術研究意欲の増大とも相まって、また当時の「反封建」運動の全国的な潮流にも支えられ、青年、そして地域社会に与えた物心両面に渡る影響は大きかった。

しかし、この運動も主に1950年以後の農政の転換(注4)により町行政と青年会、農業青年と勤労青年、さらには上層農民と中・下層農民との間で運動に対する評価、あるいは方向づけにくい違いが生じ、1950年代半ばに至り運動そのものは挫折することになる。しかし、この運動は2つの大きな流れとなって、その後の青年会と中

心とする青年活動のなかに引き継がれていく。

1つは、生産技術の研究を中心とし、農業改良普及所の指導に連なるものであり、もう1つは、「反封建」闘争の活動を受け継ぎ、後に勤評安保の闘いを繰り広げる運動方向である。

この頃の町青協は県連青に加盟しており、県連青からの指導が一層強化されるなかで、「お祭り青年団」あるいは「ジョンジョン青年団」からの脱皮が強く叫ばれ、町青協の方針もその方向へと次第に転換し、社会科学的な学習を強化していく。

町青協のこうした方針の転換は必然的に原水禁運動、学力テスト反対闘争、勤評闘争、安保闘争と一連の民主的諸運動の発展をみずから担うことになり、広範な労働者・教師・農民を結集し、ある時には、全町・全住民的な運動へと盛り上がり、ていく。

この昭和30年～35年における反封建・民主化運動は、労働者にとっては現在の地区労の前身を結成させ、また教師・父母、さらには労働者・農民の交流・提携を深めたことは疑いない。そして、それらの運動を全町的な動きになおしめたものが、青年の学習であり活動であった。

青年の活動を指導した当時の町青協の指導層が後に(30年代後半～40年代前半)労働運動の担い手となり、町議となり、町政に直接参加していることを考え合わせても、昭和30年前後の青年運動が決して青年層だけにとどまっていたわけではなく、住民の一定の支持をえていたものであることは容易に想像される。

しかしながら、昭和35年を境に町青協を中心とする活動は、その後次第に衰退の一途をたどることになる。その原因はさまざまであろうが、大きくは次の3つに分けられる。

1つは、青年運動、労働運動の盛り上がりによる政治・経済・文化の各方面での急激な民主化の進行は、昭和30年代後半の生活の相対的な安定に慣れた青年の思想・行動をかえて保守化させ町青協主導の活動・学習から多くの青年を離脱させた。

2つは、地域社会の政治権力が青年の学習・活

動に相当警戒を払うようになり、たことである。例えば、町青協に対する公的な社会教育の指導・援助が差し止められ、干渉だけが多くなってくるといふ事態がある。(昭和32年の町村合併後は社会教育費予算の減少も影響している)

3つは、一連の国政に向けての政治運動と平和運動のなかで革新政党のリーダーシップの混迷が直接運動の担い手である青年や労働者に影響を与え町青協あるいは地区労などに内部抗争をもたらしたことである。

一般的には、これら3つの原因が青年の活動を解体させたものであると考えられるが、これを地域社会とその存立基盤としている町青協に視点を置いてみるならば、およそ以下のごとくになる。

岩泉町において戦後学習集団としては青年会が存在しなかった。それが「青年の森」の処分問題をきっかけにして、それまでの「奉仕青年会」あるいは「お祭り青年会」からの脱皮をはかったことは前に述べた通りである。

町青協が「反封建」をかかげた時、その第1歩は仲間作りであり、共同学習がその基本的な武器となっていた。そして、この共同学習の成果は、新農村建設運動へと開花し、生産学習と地域課題への実践へと向けられていった。その根柢には「青年会活動がただ単なる話し合いやテキストの学習だけでは、自分たちの生活を本当に作り上げることができるのだろうか」という疑問があったことは否定できない。

しかし、この生産学習・地域課題の実践も結局はひとつの段階にすぎず、生産学習・地域課題の実践が十分に展開されないまま、その意味では、地域社会そして青年層に定着しきれないうちに、昭和30年代初頭から日本の政治をゆさぶった一連の民主化運動・平和運動へと町青協の方針は、いっさよに日本の政治と対決するにいたった。

すなわち、地域社会の生産あるいは生活諸課題の学習と民主化・平和運動に町青協は賭けていたのである。

このような急激な変化・旧来の青年会からの脱皮は、その強力な指導者集団と他の会員との学習

活動上のかい離を招き、また、こうした運動はやはり青年会の枠にとどまるものではなく、若泉町の青年運動は次第に青年会そのものを空洞化し、一方に反体制的の青年運動は、民青・社青同が担い、他方に生産学習・活動は、次第に農業改良普及所へと近づいていくことになる。

こうした問題とともに、もう一つ町村合併に対する取組があげられる。

いうまでもなく、若泉町は昭和31年の町村合併促進法により、1町5ヶ村が合併して現在の若泉町を形成している。一連の民主化・平和運動を担ってきた町青協は、いわゆる本町(旧若泉町)の青年会である。町村合併に際しては、旧町村の利害がいたるところで衝突し、その合併は決して順調であったとはいえない。しかしながら町村合併に対して、青年会が動いた様子ほとんど見られない。しかも、本町以外の5ヶ村にもそれぞれ青年会は存在していたが、青年会相互の交流もあまり見られず、それぞれが独自の活動を展開していたようである。

しかも、本町をとりまく周辺地区の青年会は、町青協の方針に極めて批判的であった。もちろん周辺地区の青年会に、いわゆる「奉仕青年会」「お祭り青年会」からの脱皮は見られず、その意味でも、町青協の方針とは決して相容れるものではなかった。

こうして、昭和25年を境にして、町青協の方針が決して若泉町全体の方針にはなりえないままに、しかも町青協のリーダー層の交代時期でもあったがため、若泉町の青年活動は、次第に旧村単位毎の活動へと縮小されてくる。すなわち、先に述べた一般的なる3つの原因と町青協、そしてそれまでの青年活動が内包していた問題が、いっしょに噴出する昭和30年代後半に、若泉町の青年会活動は、本町をはじめとして次第に衰退に向っていくのである。そして昭和38年にいたって、町青協は解散のやむなきに至り、若泉町のいわゆる「青年会活動」の隆盛期は幕を閉じることになる。

ここまでが第1の時期であり、その後今日に、至るまでを第2の時期と見ることもできる。

第2の時期の特徴は、町青協解体の後を受けて、いわゆる周辺地区の青年会活動も、次第にその姿を消してゆく時期とも言える。そして、町青協の解散後数年を経た昭和41年頃には、町教委でも把握できないほどに青年会の実態はなくなり、奉仕活動やレクリエーションなどを行事的におこなうこともほとんど不可能な状況となり、たようである。

この時期は、若泉町でも青年の流出が目に見えて増大した時でもあり、若泉町の生産基盤の脆弱さを考える合合わせれば、地域の多くの青年の関心が、次第に生産・生活諸問題へと集中していき、たであらうことは、想像に難くない。

そして、この時期には町行政・そして農業改良普及所の後継者対策が、前面に出されてくる。もちろん、その背景には、農業近代化そして地域開発の具体的担い手としての青年への多大な期待があったことは否定できない。

ともかく、青年の生産・生活への関心を振り所として、町教委・農業改良普及所の提携のもと、農業青年への働きかけが強まり、ここに4Hクラブの結成が具体化される。

4Hクラブは発足当初、50名規模の農業青年を結集するに至り、若泉町の農村部の青年を比較的網羅することになる。その学習の焦点は、農業の近代化という具体的な問題に結び付き、相対的に学習の姿勢が自主的になりはしたが、学習の最終的課題が、個々の農作業や技術に偏り、次第に農業専業青年以外の青年が脱落していくことになる。若泉町の産業基盤から見て、農業を主業とし得る層は極めて限定された層であり、しかも地域的にはごく一部の地域に限られている。

こうして、一部の専業志向型の農業青年による4Hクラブの活動は、その構成員の減少と共に次第に衰退の色を濃くし、今日(昭和50年6月現在)はほぼ10名規模の集団となっている。

このように、今や地域青年会はほとんど解体あるいは有名無実化し、それに代わる期待を背負った4Hクラブにも青年を引きつける魅力はなくなっている。

さて、岩泉町の青年をその学習と活動から見ると、さながら「実体なき青年」とでも呼べるような今日の状態ではあるが、青年活動の現状についてみると、岩泉町で町教委に登録されている青年会（部落単位）は昭和49年段階で4団体である。

それらの青年会の活動は奉仕活動とスポーツ・レクリエーション活動が中心であり、部菜の枠を出るものにはなっていない。これらの青年会は何度も解体・再編をくり返し今日に至ったものであり、もはや地域網羅主義を実質的に維持しようことは困難であり、青年会という旧来からの名称は用いているにせよ、それはむしろ「仲間集団」とでも言うべきものかもしれない。

こうした青年会を中心とする青年の動向に対して、現在、町教委を中心として全町的な青年組織の結成を目指し多くのテコ入れをおこなっている。その一つのおらゆれが宗遣社教主事（青年教育担当）の積極的な受け入れである。また、青年活動への行政的な働きかけとは別に、余り具体化はされていないものの岩泉町連合農協による農協青年部結成の動きも見られる。もちろん、町行政として農協の青年の把握と青年への期待は当然異なるものではあるが、時を同じくして、青年の組織化を考へざるを得ない状況にあるということは「地域社会と青年」の今後の動向を考へるにあたり、では大いに注目される。

これまで論述してきた旧岩泉町の青年の動向は必ずしも全ての地区にあてはまるものではない。我々が事例研究の対象地に選んだ岩泉町小本地区は町の東部にあたる周辺地区に位置している。その意味では昭和30年前後の町青協を中心とする民主化・平和運動とは直接的な交渉もなく、というよりは町青協の活動には批判的であり、地域網羅主義にもとづき青年会からの脱却を遂ることなく今日まで解体・再編成を繰り返してきた青年会と見ることができよう。もとより、小本地区の産業基盤の多様性（大きくは漁業地域、農業地域そして酪農地域の三つに分けられる）からもうかがえるように、青年会あるいは個々の青年の地域社会

との対応も一様に扱うことは困難である。

- (注1) 青年会が植樹し管理していた町有林
- (注2) 旧岩泉町の青年会の連合体・岩泉町青年会協議会の略称
- (注3) 最初のテキストが「物の見方・考え方」
- (注4) 農家課税負担の相対的減少・抑制米価より支持米価への転換・土地改良事業の推進・補助金・低利貸付金の増加・技術指導の積極化

Ⅲ 小本地区における青年会活動の史的展開

地区の概況 小本地区には茂師・小成・豊岡・外川目・大牛内・中島・卒郎・岸・中里・宮本・霞野・中野・小本の13の部落があり、戸数はおよそ700、人口3,000を数えている。このうち、太平洋に面している茂師・小成・小本の3部落は生活基盤を漁業においており、ほかに半農半漁としての中野がある。旧来からアワビ・ウニ・ワカメ・コンブそれにイカ漁といいた磯釣漁が中心で延縄や刺網もゆずかではあるが行われている。最近ではアワビ・ウニなどは資源の枯渇をまねき、また、イカ漁も大型船へのきりかえが資金難からおもいうように進まないため全般的に漁獲量は漸減の傾向にあり、養殖ゆかめに注目をみいだそうとしている。

大牛内と豊岡は昭和初期と戦後にそれぞれ入植した開拓地でもともと酪農家が多い。一戸あたりの飼養頭数は平均して7頭位である。しかし、100頭を超す大規模経営を行う酪農家が数戸を以て一方には2・3頭飼育しながら地元のチップ工場や縫製工場などに就業し雇労働者化している「酪農家」も数多くあり、経営規模の内容にはかなり大きな格差がみられる。なお、岩泉町では地域開発の一環として酪農振興をはかるため町有林30町歩を開放し、さらに、大牛内牧野組合から組合有林30町歩を借り受け51年度開設を目標に大牛内地区に牧野の造板を進めている。

その他の部落では主として稲作経営が行われて
いる。しかし、その歴史は非常に新しい。長いこ
と麦・豆・おゆ・ひえとい、た雑穀主体の畑作地
帯であったこの地域で稲の試作が行われたのは昭
和20年代に入ってからである。小本川流域にひ
るがる比較的平坦な土地条件に恵まれた地域では
昭和25年に国・県からの補助金に自己資金を加え
て土地改良事業に着手し2年後に畑地から水田へ
の切り換えをみている。その後も、開田は進行し
現在では岩泉町の「米どころ」となっている。し
かし、水田の耕地面積は平均1戸あたり1反程度
にすぎず、農業改良普及所をはじめとする技術指
導や機械化の進展をみているものの収獲量は頭う
ちの状態にある。昭和 年度の小本地区の供出米
は約 俵で農家一戸につき 俵たらずの勘定で
ある。このことは、農家といってもその多くは「
飯米確保」ないしは「飯米すら確保しえない」「
農家」であることを端的に示している。ここ10数
年来、小本地区でみられた官古や田老そして町内
での日稼ぎや県内・外人の出稼ぎの漸増もこうし
た生活基盤の脆弱さによることはいままでもない
。漁業や酪農に従事している多くのものにも同様
なことがいえる。

これまでの青年会の活動 戦後まもなく地域の
再建を意図して各部落に青年会が結成された。青
年会の組織と活動については部落ごとにそれぞれ
相違がみられ一概ではない。会員は年齢としては
15才から25・6才とこころによって30才までの男
女ほぼ40~50名から構成されていた。彼らは部落
の郷倉などを利用して集会をもち種々の活動を行
ひひろげた。いま一例として中里青年会の組織と
主なる活動を記述すると次のごとくである。

「組織」

- (i) 役員構成 会長一名、副会長二名(男
女各一名)会計一名でそれ
ぞれ互選によ、て選出
(ii) 部構成 文化・芸能・運動・衛生の
四部

「活動」

- (i) 文化部 学習活動としては冬期の夜

(18:00~21:00)改良普及員・獣医・保健所職員
それに小・中学校長を講師に招いて農業技術
(稲・畑作)生活改善などを50~60時間に行
た、て行っていた。その他として、県の巡回
図書館の利用や他部落の青年会との交流によ
る読書会そして映画会の開催。

(ii) 芸能部 正月の演芸会(劇・舞踊・
楽団)

(iii) 運動部 小本連合青年会主催の部落
対抗運動会への参加それに野球、陸上競技、
バレーボール

(iv) 衛生部 夏の消毒作業、伝染病予防
を村の指示にもとづいて行う

中里青年会は開田による水田化それに伴う新たな
稲作技術の導入を契機に昭和28年頃からその活動
が軌道にのりはじめた。小本村議選の際には、青
年会独自で候補者を推薦するなど部落での青年の
力をうかがいえる。

これらの活動は他部落の青年会においてもそれ
ぞれの特色を示しながらも共通にみられるもので
ある。たとえば、小本青年会では地元の漁業協同
組合と提携し、さけの天然ふ化を目的とした小本
川での「さけとめ」(9月1日から11月30日)、村
有林への植林、部落の氏神様である八幡神社の祭
典準備、消防団との夜警、季節保育所の開設など
を会の活動資金の確保と部落への労力奉仕といた
た二重の意味をもって行、ていた。

小本連合青年会は昭和26年に小本青年会が中心
となって単位部落青年会を組織して結成された。
結成の動機としては「村内の青年の親睦と結束を
強める」「都会人と違、て自分の孝えていゝこと
を榮言したり、又、会議のやり方を学ぶため」と
言われる。当時の主な活動としては(i)単位青
年会対抗の陸上競技、ヨット競争、相撲大会(ii)
弁論、演芸大会(iii)研修旅行などであるが、村
議会と提携しての三陸縦貫鉄道早期着工の陳情や
平和祈願のための「平和塔」建設計画を行、てい
る。昭和29年から30年にかけては官古市・下関伊
青年連絡協議会に参加し、翌31年の合併直後には
岩泉本町の青年会に働きかけて実現をみなが、た

ものの岩泉町連合青年会の結成を企てるなど対外的にも積極的な活動をくりひらした。しかし、こうした活動も岩泉町合併後はしだいに停滞し始め33年頃には消滅して化している。これに応じた形で部落青年会もまた従来のような活力を失いつつ、35・36年頃にはほとんど会としての機能を失うにいたっている。戦後まもない時期に部落ごとに発足した青年会は10余年を経てその活動を終熄した。

その後、昭和39年頃に大井内・船渡を営む青年たちが組織の再興を企てる動きをし始めるとそれに呼応した小本・小成・茂師・中里・中島・中野の各部落でも再組織化が行われた。そして、42年2月には、およそ10年ぶりに小本地区連合会を結成した。その際、組織化の課題として、たとえば、「中野友の会」においては(i)従来の青年会活動からの脱却(ii)部落の旧弊を改革し個人の問題の解決(iii)仲間の親睦をはかり協力を強めることなどが掲げられているように、これまでの青年会とは「会」の名称変更にとどまらず、その内容において質的にかなり異なる様相をうかがわせるに十分であった。しかし、具体的な活動は「課題」とはかけ離れた部落内の消毒、季節保育所の開設さらには部落氏神様の祭典準備に盆踊りと従来のかゆやらないものにとどまり、青年の組織を育てるうえでの指導者や理解者がいなか、たことや会員の年齢規定が明確でなかったため、地域における会の位置づけが曖昧であったことなどの問題を残しながらゆずか数年後の45年頃には衰退の一途をたどりはじめた。

現在の活動 青年会としての機能をはたしているのは茂師青年会ただ一つである。茂師部落在住の18才から25・6才までの15名によって組織されている。会の目的は(i)レクリエーションを通して団体精神の育成を図ること(ii)地域への奉仕の二つにおいている。これまでの具体的な活動としては、前者については野球、バレーボール、卓球、盆踊りそれに隣接している田野畑村、田老町青年会との交換キャンプ、後者としては消毒、道路の刈り払いなどが主なものである。会員の職業別構成では会社員3、公務員2で残りが漁業従事者

であるため、おもうように集まりをもちることが出来ず、出席者も常時6〜7名とほぼ半数にすぎない。青年会が設立された際、部落のよせる期待も大きいものであったが、目下のところはこれにこたえるにはいたっていないのが現状である。

IV 若干の課題

我々が岩泉町と小本地区の青年活動を主として地域青年会に焦点をあててその史的展開を論述してきたのは「地域社会と青年」の関係のありかたを歴史的にとらえるためである。そのさい、我々の関心は一つには地域の政治・経済上の急激な変化ゆえに青年はみずからの生活をまして地域社会をいかに把握し、どのような対応をしてきたのか。二つには、青年層として彼らが自らの青年運動の歴史をふまえながら地域社会との関係をいかに模索し活動を展開してきたのか。そして、三つには、青年の学習や活動が地域社会にと、ていかなる意味をもってきたのか。の三点を明らかにすることにある。これら三つの関心点は今日の地域社会における青年の活動を考察するさいの関心点でもある。

岩泉町における青年会活動は昭和35・6年頃にほとんど消滅するにいたったことは前述したとおりである。そのさい、消滅をもたらした理由の一つとして指摘された青年の村からの流出も最近ではようやく停滞しつつあり、むしろ、村にまいもいる傾向にすらある。こうした状況のなかで、青年の組織化が青年たち自らの内部からせげはれつつあり、村もまた彼らのそうした動きに期待をよせている。もちろん、行政とりわけ社会教育行政が中心となっているいろいろの方策を講じている。茂師青年会は最近の一連の動きを示す一つのあらわれともいえよう。しかし、昭和30年前後の活力に満ちた活動をかいまみることとはできない。かつてのような村を基盤にした地域ぐるみの組織化と活動が生まれにくいところに今日的な特徴を指摘することができる。同時に、このことは地域くま

たは村)と青年をめぐる今日的な課題でもある。

現在、青年の多くにとりて村はもはや生産・生活の場ではなくなっている。とくに、岩手町のように生産基盤の弱いところでは単独の産業で家族の生活を維持していくことはむずかしく、いそお農業以外の他産業への依存を強めざるをえない。県内・外への出稼者は多くがう行われているが最近では通年の出稼者が多く増えている。村にもどってきたものを含め、青年の多くは若者・田舎をれて町内でオニ・三次産業に就業している。つまり、村に住んでいても生産と生活の場は明らかに分化しているのである。このような状況にある青年が「一歩、青年会で活動して人々が今日の青年に「機能的精神」または「奉仕的精神」の欠けを強調しているが一村に対して「機能的」または「奉仕的」精神をもち、かつ村を基盤にした組織化をはかることはむずかしく困難となっている。むしろ、青年たちは自らの関心を村の外にひろげ、自らの生産・生活の場のなかに求め、仲間とのつながりをもちつつある。

しかしながら、こうした一般的な傾向のなかで最近、小成部落で漁業に従事している十数名の船の仲間が小成地区の漁業青年に働きかけ「ワケモノ」のあつまりをつくろうとする動きがみられる。そのあつまりは漁業近代化資金の貸付に関する地元漁業協同組合の方針をめぐってある。これでは、資金貸付にあたり「家筋」や「漁獲高」さらには「漁協理事」との個人的なつながり」などで、その金額に制限が行なわれていた。このため、漁船の大型化や養殖業の進出に漁業近代化資金の融資を希望する「ワケモノ」たちから不満の声があがりはじめている。彼らは資金貸付額の拡大と漁業後継者育成の問題を解決するために漁協への意見の反映と「ワケモノ」同志のあつまりの必要性とを述べている。青年たちは地域における自らの生活課題の解決とそれを進めるための仲間の組織化への萌芽として注目している。

地域における青年の組織化と活動の振興は、わが国今日の課題として多くの人びとの関心を集めており、この点についての組織論や振興計画に

関する研究もさかんに行われている。しかしながら、そのさい、地域生活や地域運動において青年が果たしている役割、さらには、変動する地域社会にたいする青年の認識を把握することに十分な関心がはらわれていたとはいえず、いさよがある。我々は事例研究を通してその点にこたえようとするものである。